
ねじれた時計

つきかはうそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねじれた時計

【コード】

N8502Q

【作者名】

つきかはつそ

【あらすじ】

近未来時間系短編SF。恋人を失った男は過去と未来に行くが…。

近未来。

進歩し続ける科学は、人類の夢であった時間機、タイムマシンを生み出した。

理論上は、これで過去や未来に自由に行くことが出来るはずだ。しかし、確証は無い。

そこで、試してみることにした。つまり、誰かを実際に時間機に乗せ、過去や未来に送ってみようというのだ。

ただし、適当な者を送るわけにはいかない。一度時間機を動かすには、とてつもなくコストがかかり、またその他の準備、調整にも時間がかかるため、一度で成果をあげなくてはならない。

そこで、時間機の準備を進める一方で、時間機の搭乗者の選考を始めた。

過去には数十億人だった人口は、百億人にも達していた。搭乗者の選択は、進められた……。

*

彼は悲しみにくれていた。

最愛の恋人を失ったのだ。

混雑した駅でのことだった。十四時二十分の電車がホームに滑り込んでくる直前、彼女はいきなり、線路に倒れこむように落ちた。当然、電車に轢かれ、彼女は命を落とした。

なにせ混み合っていたため、事故として扱われたが、彼は青いコートが翻るのを見た。

彼女は殺されたのだ。きつとあの青いコートの人物が犯人に違いな

い。さらに、その顔をちらりと見たのだ。そう考えた彼は、その人物に復讐を誓うと同時に、何とかして彼女の姿をもう一度見たいと考えた。

その思いは成熟し、狂気にじみたものになっていった。

*

搭乗員にするのは、過去又は未来に行く理由があり、かつ歴史を大きく変えない人物なら都合が良い。そう考えた「時間機」研究員らは、民間に希望者を募り、奇しくも、彼を搭乗員候補にした。その旨を彼に伝え、その能力、目的を確認することにした。

「時間機」研究室に呼び出された彼は、そこで時間機と、その実験計画について知った。研究員が、

「やってみる気はあるかね。」

と訊ねると、彼はすぐに答えた。

「是非やらせてください。」

「しかし危険かもしれないのだよ。現在に帰れなくなるかもしれない。」

と研究員は言った。生きている彼女をもう一度見られるなら危険なほど。そう思った彼は、

「構いません。やらせてください。」

と答えた。

これほどの決心があれば申し分ない。人を一人助けるくらいなら、些細な事実は変わり、結果を確認することができるが、歴史は変わらない。彼は時間機の搭乗者選ばれた。

実験で必要なのは、過去と未来両方に行くことだ。その途中、過去に行ったときに彼は行動することになっていた。

やがて準備が整った。研究員は、何度も繰り返した注意をもう一度口にした。

「過去や未来で、絶対に自分にあわないように。また、あなたを知っている人物にも顔を見られてはいけない。」

彼はうなずき、時間機の中に入った。研究員が時間機から離れると、

時間機は低い唸りを上げ、彼を乗せて過去へと消えた。

時間機での旅は一瞬だった。事前に教えられた通りにコントロール・パネルを操作すると、全てが掻き消え、次の瞬間、再び現れた。パネルは過去に着いたことを示している。彼女が死んだ日の、十三時三十五分。「事故」が起こる四十五分前だ。彼は時間機から降りた。周囲は閑散として人気が無かったが、もし誰かが見ていたなら、時間機が消えたように見えただろう。時間機が発見されるのを防ぐ為に、機体には迷彩ポリマーが施されている。これは、機体に背景を映し出し、周囲に溶け込ませるものだ。ここにあることを知らなければ、まず気付くことは無い。彼は身震いした。時間機に乗った時はかなり暖かかったのだが、「今」は真冬だった。あの駅からは五、六分の距離だ。時間はある。彼は近くの店でコートを買うことにした。以外な場所で、彼は過去に来たことを実感した。何気なく入った洋服店は、色とりどりの単色の上着で大部分が占められている。一時期、単色の上着が流行したが、すぐに廃れ、見かけなくなっていた。その中の一着を適当に買って（研究員から、資金はたっぷりともらっていた）、外に出る。時計を見ると（時計は「今」の時間に合わせてある）、十四時五分を示している。彼は歩き出した。無意識に早足になっていたらしく、駅には五分弱で着いた。

駅は彼が覚えている通り、人で溢れかえっていた。群衆を掻き分けて彼女がいるはずのホームへ行く。やはり彼女はそこにいた。まだ生きている彼女が、少し離れた場所に立っている。彼は彼女に見られぬよう、顔を隠しながら彼女の方へ近づいていった。

彼女に触れられそうになるまで近づいたとき、はっと気付いた。そろそろこの時間の自分が来るはずだ。振り返ると、もっとも見慣れた顔がこちらにやってくる。彼は身を翻すと、周りの人間を突き飛ばして走り出した。背後の悲鳴に一瞬だけ振り返ると、この時間の彼がこちらを見ていた。あわてて前を向いたが、見られたかもしれない。そのまま時間機まで走る。途中でコートを脱ぎ捨てた。彼女をもつ一度見ることができた。自分に見られたかもしれないことな

ど、些細な問題だ。彼はそう考え、一度現代に戻るべく時間機に乗り込んだ。

彼は現代に戻ると、研究員に、過去への遡行が成功したことを伝えた。彼が戻ってくると思われ、未来に行くため、時間機の準備が始まったが、準備が完了するのは数年かかるとのことだった。

彼はしばらく彼女を見られたことを幸せにおもっていたが、時間がたつにつれ、彼女が死んだことに変わりはないと思うようになった。彼はもう一つの願望、あの青いコートの人物への復讐をかなえたいと思いつけた。

やがて、時間機の準備が終わり、未来へ行く日が来た。

時間機の開発と平行して、開発されていた物がある。時間機での旅において、過去へ行くのであれば、任意の座標をプログラムし、行き先を決定することで、ある程度行き先の状況、起こる出来事などの情報を得ることができる。しかし、未来に行く場合、現代には未来の情報は無い。それを得るためには、実際に未来に行くしか方法がない。かといって、いきなり人間や、時間機を送るわけにはいかない。未来に行く場合でも座標の設定はできるが、その場所の状況はわからない。今回の実験で行くのはごく近い、数週間後の未来だが、後には数十年、数百年先に行くことも想定されている。極端に言えば、着いた所が海、もっと悪ければ火口、という可能性もあるのだ。一機限りの虎の子を失うわけにはいかない。

そこで、「TTD（時間旅行人形）」が開発された。これは小型の時間機で、カメラ等々多数のセンサー、記録装置が搭載されている。また、時間機と同じく、迷彩加工がされている。これを未来に送り、様子を記録させて現代に戻す（戻ってこない場合は、人が行くことは不可能である証拠だ）。

そうすれば、未来のを知ることができる。未来に行く人間は、TTDが行った地点の同じ時間に行けばよい。結果、未来には時間機に乗った人間と、TTDが同時に存在することになる。

彼は研究室にいた。目の前のモニターには、未来に行ったTTD

に記録された映像が映されている。T T Dが転送されたのは、未来のこの町だ。といつても数週間後なので、変化はあまりない。映像がゆっくりと上下に揺れるのは、T T Dが空中を漂っているからだ。まれに人が通り過ぎる他は変化が無い。するとそこで風景が変化していく。T T Dが移動しているらしい。再び画面が停止する。今度は一人の男が映っていた。フードを目深にかぶっているので顔はよく見えない。男が時計を見た。その時わずかにのぞいた顔を見て、彼は愕然とした。あの青いコートの人物の顔だ。何故か、その顔をよく知っている気がした。奇妙に思いながら画面に目を戻すと、もう一つの人影が画面の端に映った。と、そこで、一瞬何も映らなくなり、次に研究室の壁が映り、映像が消えた。安全は確認された。それに伴って、あの青いコートの男がいることが分かった。彼は、未来である人物に復讐することを決めた。彼は時間機に乗り込んだ。ブーツには刃の長いナイフを仕込んである。時間機が静かに唸りだす。

未来への旅は問題なく、一瞬のうちに行われた。周囲に人がいなくなるのを待って、彼は外に出た。位置はT T Dが最初にいた場所だ。T T Dがいるはずの空中を見ると、かすかに何か動いているのが感じられた。それが動き始めた。たしか、T T Dが向かった先にあの男がいたはずだ。彼はT T Dのカメラに映らないように、後をついていった。研究者たちに、犯行を見られるのはまずい。それに、あの映像に自分は映っていないかった。やがてT T Dが止まっらしい。迷彩ポリマーに映される映像は、移動する際にはわずかに遅れが出る。そのため、注意して見れば風景が少し歪んでいるのがわかる。

あの男はいた。映像で見たとおりに、フードを目深にかぶっている男が時計を見る。もうすぐT T Dは現代に戻るはずだ。彼はナイフを引き抜いた。男はこちらを見ていない。彼はT T Dがぎりぎり消えるか、消えないといったところで、男に向かって走りだした。頭を伏せ、腰の高さにナイフを構え、走る。男がこちらに気付いた。

一瞬その顔を見ると、驚愕の表情が見えた。ナイフはあっさり男のわき腹に突き立った。ナイフを引き抜くと、男はうつぶせに倒れた。目的を果たした彼はナイフを捨てると、時間機に向かった。時間機にたどり着き、乗り込んでも、騒ぎは起きなかった。

研究員には、無事に未来へ行けたことのみを報告した。実験の成功によつて、時間機は実用化に向けてさらに研究がされることになった。彼は研究者たちから多額の報酬を受け取り、研究室から離れた。彼の心は高揚していた。ついに復讐を成し遂げたのだ。しかし、と彼は思った。もしかすると男は死んでいないかもしれない。確かに今は死んでいない。あれは数週間後のことなのだ。彼は、男が死ぬのを確かめたいと思った。場所は分かっている。その場所に、自分が時間機で行った時間にいれば、時間機で過去から来た自分が男を刺す場面を見ることができる。あのとき、自分自身を見た憶えは無い。自分に見つからなければ問題ない。

数週間後の、時間機で来たことがある時間。自分と、あの男が来るはずの場所。彼はそこに立っていた。顔を隠すため、フードをかぶっている。あの時は気付かなかったが、ここは町の中で最も寂れた地区の、裏通りだ。こんな所に来る人間はほとんどいない。

今は誰もいない。もうすぐ、フードの男と自分が現れるはずだ。なんとなく、何かが漂っている気がした。しかし周囲には何も無い。彼は時計を見た。もうすぐだ。そのとき、誰かが走ってくる音が聞こえた。振り向くと、何者かがこちらに走ってくる。その顔が見えた。彼はあまりの驚きに凍りついた。と、わき腹に焼けるような痛みがはしった。目の前にあるのは、紛れも無い、自分の顔だった。ナイフが捻られ、引き抜かれる。今の彼は倒れた。遠ざかる足音が聞こえる。続いて、微かな唸りが聞こえた。過去の自分が時間機を動かしたのだらう。わき腹からは際限なく血が流れ出している。薄れる意識の中で、彼は過去に行ったときのことを思い出していた。あのとき、彼は。

彼は思った。あのときは、青いコートを着ていた、と。

(後書き)

中で初めて書いた小説です。読んでくださった方、ありがとうございます。
ございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8502q/>

ねじれた時計

2011年4月11日10時27分発行